

ジュニア部門 〈母へのおもいに対する作文〉

小学生部門 入選作文

母への思い

清水裕介

ぼくは、はじめに「母への思い」と聞いた時、「いつもおいしいご飯を作ってくれてありがたいな。」とか「たまにはのんびりできるようなお手伝いをしたらいいかな。」ということ考えた。でも、いざ書こうとして原こう用紙を前にした時、母さんの姿といっしょにいろんな思い出がうかんできた。

ぼくはようち園の年中のころ、母さんにさそわれてスイミングスクールに通いはじめた。水がとても苦手だったけど、当時はなぜをひいてばかりいたので、健康によいだろうと母さんが考えたのだ。だけど体験にいった時は、楽しかったのに、その後は毎回泣いてしまった。ぼくはおぼえている、母さんとはなれるのがいやだったことを。いつもガラスのむこうにいるのに。母さんは、いつも泣くぼくを見ているのが本当につらかったと、だいぶたつてから聞いたことがある。それでも、根気強く、送りむかえして、応えんして、はげまして……。四か月もつづいた。やっと泣かなくなった。今思えば、母さんも大変だったろうな。母さんは本当にしつこいというか、あきらめが悪いというか。逆にそういう気持ちでぼくに教えたかったのかもしれないけれど。

あれから六年、ぼくはまだ水泳をつづけている。というよりは、水泳はぼくにとってなくてはならないものになっている。あの時のしつこさに感謝しないとけない。ありがとう母さん。

この後、毎回泣いていたぼくが小学校三年生くらいになると、毎日泳ぎたいと思うようになるまでに変化していった。水泳にとりつかれたぼくは、それはそれで母さんにとって大変だっただろう。送りむかえがどんどん増えて、仕事から帰っても、休むひまが無かったから。ときどきそんな母さんにお礼の気持ちを伝えたいなと思ってみたが、うまく言えなかったりした。母さんはぼくのそんな様子を分かっている、いつも「いよ、いよ。」と言っていた。ただ「おかえしは、ベストタイムでおねがいします。」といういやらしいプレッシャーをあたえてくるころは、

母さんらしい。それはぼくの練習のがんばりの源ではあると思うが、結果がいつもうまくいくとは限らない。そういう所も母さんは分かっている、水泳の大会のあとはほぼ毎回はげまされた。母さんのやさしさが心にしみる時間だ。ぼくのことをよく分かっている母さん。そんな母さんにいつも助けられていたと思う。もつと喜ばせてあげたかったのに。

高学年になった時、ぼくの中ではとてもショッキングな出来事があった。水泳のクラブチームのいせきだ。とにかく、どこかにいせきしないと大好きな水泳をつづけられなくなるということだったので、一大事だった。さらにそのいせき先に迷った。まよえる子羊に母さんは、「自分のことは自分で決めて。」と言った。ぼくはなやみになやんだが、自分で決断することができた。結果として、ぼくと妹は別々のクラブチームにいせきした。それでも母さんは「二人ともガンバってね。」とこころよく送り出してくれた。どちらも応えんしてくれて、今まで以上にいそがしい送りむかえは、分きざみとなった。しばらく、ぼくは母さんの姿を見て、本当にこれでよかったのか？こんなに苦労させてしまったと思っていた。さらに一年間ほどタイムものびず、新しいクラブチームになじみきれずのじょう態でいた。そんなぼくに母さんは、「どこで泳いでも、あなたの愛する水泳には変わりがないよ。もつと楽しんで。」と言ってくれた。ぼくはかたの力がぬけたような気がした。やっと前に進みだした。母さんに背中をおされたから。

こうしてぼくはたくさん時間を水泳にそそいできた。だからうれしいこと、つらいこと、悲しいこと……。いろんな気持ちをその中で味わってきたと思う。でもそこにはいつも母さんがいた。きっと母さんも同じ気持ちを感じていたんだろうなと思う。だったら、楽しさやうれしさをいっぱいあげたい。以前、一年近くベストタイムが出なかったころ、ある大会でタイムが四秒もちぢまった。自分でもその時はすごく感動し

たけれど、それ以上にコーチや母さんがとても喜んでくれた。何よりもうれしかった。だれかのためにがんばってその人が喜ぶ姿を見ることは、とても幸せな気持ちになれることを知った。これから自分自身のためにいろんなことをおもしろい楽しんで、せいっぱいがんばる日々を過ごしていきたい。そうすることが母さんの笑顔につながると思うから。また近ごろは母さんに口うるさく言われることが少なくなつて会話もへつてきたが、母さんに見守られながら、自分の足で強く歩いていきたい。母さんも安心するだろうから。